研究報告論文

大学におけるジェンダー教育実践の課題

——受講生の意識変容を中心に 1——

近藤　弘（立教大学文学部　教授）

1. はじめに

近年、女性学・男性学・ジェンダー研究が教育の場でとりあげられるようになってきた。関心のある者が手探りで調べてといった個人的な段階から、制度的に取り組み具体化してゆく第二ステージに入ったという指摘もされている。[1] 小論も大学で試みたジェンダーをテーマとした授業のあり方を特に受講生の意識変容を中心に考察したものである。

なお、ここで用いた「ジェンダー教育実践」という表現はある特定の立場に立ったジェンダー教育実践という意味ではなく、ジェンダーをテーマとした、あるいはジェンダー論に関する授業実践という意味で用いている。その点をあらかじめ了解を願う。

2. 授業の概要

すでに本年報第2号（2001年3月刊行）に「全カリ総合B『現代社会とジェンダー』を終えて」と題して授業の概要については報告済みであり、ここでは省略する。なお、授業の概要を一覧表にした資料として後載したので参照いただきたい。

3. 受講生の意識変容（その1）—リポートの分析から—

小論ははじめにでも述べたように、受講生のジェンダーに関する意識の変容の分析を中心にジェンダーをテーマとした授業のあり方を検討することをその目的としている。

そのために用いた資料は授業時（第 13 回）に実施した「ジェンダーに関す

る調査」（以下調査と称す）および授業最終時（第14回）に作成させたリポート（各人でテーマを自由に設定させたリポート）である。

以下、リポートおよび調査の順で考察していくことにする。

まずリポート（サンプル数 138）を次の基準にもとづいて分類した。男女二元論への疑問、フェミニズム・女性学（男性学）への肯定的評価、男性中心社会への批判、性別役割分業への疑問、「らしさ」への疑問（ジェンダー・バイアスへの気づき等）、性別の生物学的決定論への疑問、ジェンダーフリー社会の実現等を論じているリポートを「肯定群」。男女二元論の肯定、フェミニズム・女性学批判、「らしさ」の肯定、性別役割分業の肯定、ジェンダーフリー社会への疑問等を論じているリポートを「否定群」。そのどちらにも入らないリポートは「不明群」とした。なお、この分類はあくまでも分析の便宜上おこなったもので、価値判断を含むものではない点に留意されたい。

その分類結果は以下の通りである。（数値は実数）

	肯定群	否定群	不明群	計
全体	102	30	6	138
女子	59	9	4	72
男子	43	21	2	66

全体としては肯定群が圧倒的に多い。授業の成果であると単純にはいえないが、少なくとも性別を社会的・文化的性別と捉えるジェンダー理解は受講生の多くに受けとめられたといってよいのではないか。女子の方に肯定群が多い（女子全体の82%）ことは予想された結果といえるが、それに劣らず男子も決して少なくはない（男子全体の72%）ことが注目される。

次に全リポートから明確にジェンダーに関する意識変容を言明していると思われるリポートを抽出した。その結果は以下の通りである。（数値は実数）

	肯定群	否定群	不明群	計
全体	53	14	3	70
女子	31	6	3	40
男子	22	8	0	30

意識変容を言明しているリポートは肯定群に圧倒的に多い（全体では76%）。男女でみてもそれぞれ肯定群が78%、73%を占めている。全体的傾向として、性別を社会的・文化的性別と捉えるジェンダー理解の方向へ意識変容が生じたといってよいであろう。もちろん、数は少ないながらそうしたジェンダー理解に否定的な意識変容を言明しているリポートも存在していることは無視できない。そのあたりを群毎に具体的記述（抜粋）を紹介しながらみてみたい。

＜肯定群＞

○私はこの授業をうけていく中で、様々な考えを聞き、さまざまなことを考え、ジェンダー問題に対する考えを深めていった。授業をうける前からジェンダー問題について多少の知識はあったが、授業内で多くの問題が提起され、自分の中のジェンダーバイアスに気付かされた。自分は男女の性差を意識せずに生きてきたつもりだが、ジェンダー概念をこんなにも強く持っていたとわかり、驚いた。それだけこの社会には根強くジェンダー概念が染み込んでいるのだろう。このことに気付いただけでも、私にとってかなりの収穫であった。ジェンダーバイアスを崩していくには、まず自分の中の、社会の中のジェンダーバイアスに気付かなければならないからだ。多くの人が気付いていないからこそ、ジェンダー問題は解決せず男女差別が無くならないのである。（仏文１年女子）

この受講生はジェンダーに関してある程度の理解はもっていたようであるが、授業を受けることにより、自分の中にいかにジェンダーバイアスが染み込んでいたかに気づいたという。そして、そうしたバイアスに気づくことなしに男女差別は無くならないと指摘する。

こうした気づきは決して女子学生だけではない。次は男子学生のリポートからである。

○この講義を通して僕は今までとは違った視点をもてるようになったと思う。僕はフェミニストでも男性主義者でもなく、男女、性等の問題については比較的柔軟に考えられるんじゃないか、なんて思っていたけど、僕の思考の根底にはやはりすりこみがあったことを、講義の中で認めざるを得なくなった。ほとんど無意識に近いそのすりこみはとても一元的で排他的で絶対的であり、比較的柔軟に考えられるはずの僕にはちょっとショックな事実だった。そして現代社会、その中でも日本がジェンダーという問題に対してあまりにも無関心であったこともより深く知り、この問題について考えることの意味の大きさを知った。「意識改革」をすることのできた講義だった。（経営４年男子）

この授業を通して「意識改革」が行われた様子を描いている。

いずれもこの授業を通して自分の中のジェンダーバイアスに気づき、それがいかに深く刷り込まれたものであるかを「驚き」や「ショック」として受けとめている。ジェンダーに関する意識変容はまず自分の中のジェンダーバイアスを顕在化することから始まることをこれらのリポートは示しているように思われる。

＜否定群＞
数は全体として少ないものの、男女平等に対して否定的な考えを表明している次のようなリポートがある。

○私達はこの授業を通してジェンダーというものについて取りあげてきたが、では果たしてジェンダー、文化的性差をなくすことができるかといったら、それは不可能に近い。もし一度無くすことができたとしても、必ずもう一度形成されるだろうと思っている。理由の一つは、ジェンダーという概念が私達の無意識の部分まで浸透してしまっていることである。（略）二つ目の理由は、どこまでがジェンダー差別でどこまでがジェンダー差別でないか、線をはっきりとひけないことである。（略）3つ目の理由は、結局男と女は違うからである。これを言ってしまったら終わりかもしれないが、違いがあれば差が生まれてくるのは当然のことで、イギリスなどで行われるレディー・ファースト、女性にとってはありがたい差だが、がいい例である。（略）ここで重要なのは、私達が目指すのは、目指すとするならば、ジェンダー差別を無くすことではなく、そうした言葉があることに気づき、減らすことなのかもしれない、と私は思う。（英米1年女子）

ここで指摘されている理由はそれぞれ説得力を持っている。これに対する説得力のある反論をきちんとできなければ、こうした意識に対する変容をもたらすことはできないであろう。

さらに授業を受け、女性差別に敏感になったといいながらも、一方で違和感を持ち、それが結局「男女は同等（平等）であるべきだ」というジェンダーメッセージへの違和感だったと告白している次のようなリポートがある。

○前期の授業を受けて感じるのは、いま現在社会に起こっている性による差別、その大半が女性差別であるが、そういうものに対して、非常に敏感になったことである。（略）しかしその一方で、授業を受けながらなにか腑に落ちない感覚を抱いたのも事実である。それが最近になってようやくわかってきた。つまり、ジェンダーにしても、この授業にしても、「男女はすべて同等（同じ）であるべきだ」という考えを前提にしていた。たしかに、この考えは一見良さそうに思える。私も今までそう思ってきた。しかし、本当に上の考えは私達にとって幸福を与え、不安のない、安心のできる社会を構築するに至るのか。私は違うと思う。なぜなら違いを無視しているからである。（略）今の日本社会は、フェミニズムなどの影響で、男性の役割、女性の役割という意識が希薄であるように感じる。よって男女の違いをお互いに認め合う。それを前提とした、男女が平等な社会を模索すべきである、と考える。（経営1年男子）

はたして違いを無視して男女平等は達成されるのかという鋭い問い。むしろお互いの違いを認め合うことを前提として男女平等の社会を模索すべきだという。男女平等とは何かをあらためて問い直す必要を迫るリポートといえよう。

このように否定群でも、この授業を通して男女差別の現実があることは肯定している。しかし、だからといって男女が同等（平等）になることはできないという。そこであげられている理由を一概に退けることはできないであろう。授業者としてはこうした言説にどう対応していくかが問われているといえよう。

＜不明群＞

若干ではあるが、意識の変容を明言しながらも、肯定にも否定にもつくことができず、いわば迷っているリポートがあった。その一つを紹介する。

○“ジェンダー”というテーマで約 3 ヶ月間学んできた結果、私自身で出した結論というのは、“決して答えは出ない問題である”ということであった。それは、個人各々の価値観や今まで育ってきた環境が違うからである。だからおのずと物事に対する考え方が違って当然であるし、もちろん、このジェンダーに関しても、である。“ジェンダー”という言葉の持つ意味や背景はとてつもなく広い。その言葉を定義づけするということは極めて困難であるし、はっきり言って無謀だと思う。（英米 1 年女子）

この受講生が出した結論「決して答えは出ない問題である」は、実は授業の最初に授業者が述べた言葉でもあった。その意味でこの答えはまさに授業のねらいを正直に表明したものだということもできる。しかし、ここで立ち止まってしまうわけにはいかない。こうした答えを抱えつつさらにジェンダーを問うていくことがジェンダーの授業には求められるのではないだろうか。

4. 受講生の意識変容（その 2）—「ジェンダーに関する意識調査」の分析から

先にも記したように「ジェンダーに関する意識調査」を第 13 回の授業時に施行した。サンプル数は 127（女子＝69，男子＝58）。ここでは単純集計にもとづいて分析した結果のうちいくつかを取り上げてみる。なお、単純集計表を資料として後掲してあるので参照されたい。

まず、質問項目 1 の「全カリ総合 B を受講して 4 月の時点より自分の考えに変化があったと思いますか」に対しては、4 月の時点より自分の考えに変化があったと思う受講生は全体で 47%、半数に近い。それも男子に多いのが興味深

い。これは質問項目 9 の「現代社会とジェンダー」の授業の継続を望む割合の高さとも相関する（全体＝44%、女子＝46%、男子＝41%）。この変化がどのようなものであったかについては 3 で分析した。

次に質問項目 2 では男が女の上に立って指導してやる社会風潮が残っている、というワーディングに「男は女より偉いのだから」という「偏見」とも思われるワードをあえて入れてみたが、「はい」という割合が高い（全体で 70%）。男女差もあまりみられない。

次に授業を聞いて「自分はセクシストと思うことがあるか」（質問項目 6）と尋ねてみた結果、「たくさんある、ときどきある」をあわせると過半数を超えている（女子＝54%、男子＝50%）。これをもって授業の「成果」を主張するつもりはないが、やはり彼らの意識に一定の影響があったことは認めてよいであろう。特に女子に若干割合が高いのは、女子の方がセクシズムに敏感であることの表れとみることもできよう。

さらに「女性は育児と家事が大切。あまり外で仕事をしない方がいい」（質問項目 8）という意見に女子の 90%が反対であり、男子でも 66%が反対であった。この結果を見る限り受講生の性別役割分業意識はかなり薄れていることがわかる。

質問項目 9 に関してはすでに本年報第 2 号で紹介してあるので省略する。
質問項目 10 では記憶に残っているキーワードをあげてもらった。またその理由も記述してもらった（質問項目 11）。その主なものを 6 つあげておく。
①ジェンダーフリー②ジェンダー③女に生まれるのではない女になるのだ④自分らしく⑤女性学⑥affirmative action（アファーマティブアクション）

その理由として、①に関しては「社会について考え直してみることが多くなった」、②に関しては「頻繁に使われていた」、③に関しては「生まれた時点で男と女が存在すると思っていたが、この考えを覆すものだと考えた」、④に関しては「ジェンダーについて考える目的は「自分らしさ」を求めることだと実感した」、「性別に縛られない自分らしい生き方をする大切さを知った」、⑤に関しては「女性学という言葉を初めて知ってその内容が革新的だと思った」、「フェミニズムについて考えさせられた」、⑥に関しては「世界の性差別対応を知った」などがあげられていた。

特に「ジェンダー」という言葉は「いろいろな先生がたが講義で使っていて重要な争点だ」という指摘は重要である。授業で使用される述語（専門語）と受講生の「日常性の現実構成」がどこでどう繋がっているのか、ジェンダーにかかわる「知識獲得」（マスタリー）の問題とかかわって興味深いところである。

なお、質問項目 12 で本授業全般に関する意見、感想を自由記述の形で聞い

ているが、紙面の都合で割愛する。

5. おわりに

以上、ジェンダーをテーマとした授業実践を受講生の意識変容を中心に分析してきたが、おわりにこの実践を通してジェンダーをテーマとした授業のもつ課題をいくつか取り上げて小論を閉じることにしたい。

自己のジェンダー論の授業実践を分析した日野玲子はジェンダーをテーマとした授業（女性学教育）の特徴を次のように述べている。[2]

> 女性学・男性学・ジェンダー研究を教育の場に取り入れることは、単純に知識を伝達して済む話ではない。女／男という性を切り口に、性別によって固定化された生き方を問題としたり、それを支える文化や制度を問い直すなど、各人がどのような生き方をするのか、どのような社会のしくみをつくってゆくのかといった、価値観を教育の課題とする、きわめて実践的な活動になる。

どの授業でもそういう面をもつのであろうが、特にジェンダーにかかわる授業は「単純に知識を伝達して済む話」ではない。各人の生き方にかかわる価値観を課題としている。

その場合、まず直面するのは評価をどうしたらよいのかという問題である。日野は自分の授業に対する学生の反応（評価態度）を三つにわけている。共感、反感、拒否である[3]。そうした学生の反応（評価態度）に対して授業者はどのような評価をくだすべきか。共感には高い評価を与え、反感や拒否には低い評価を与えることで済むであろうか。ことが生き方にかかわる以上、そう簡単に評価をくだすことは難しいであろう。今回の授業においても評価をどうするかで迷った。いろいろ議論した結果、今回は出席状況、リポートの提出の有無といういわば客観的メルクマールで評価することにした。そのことは開講時に受講生にあらかじめ説明したが、受講生の中には「B」という評価に対して、自分のリポートが不十分なのかと聞いてきた者がいた。それに対して評価の基準を説明したが、必ずしも納得はさせられなかった。ジェンダーをテーマとした授業を大学の正規のカリキュラムに組み込む形でおこなう以上、評価を避けることはできない。この問題は今後も課題である。

また、日野は内海崎の女性学教育は「フェミニズムの視点が不可欠」である

が、「単なるフェミニズムイデオロギーの注入（＝教化）」であってはならないという指摘を受けて次のように述べている。[4]

この指摘に私も同感するが、教師である私の中で「隠れたカリキュラム」として作用する女性学の価値観と、単なる「フェミニズムイデオロギーの注入」を、いかに相対化していくのか。女性学を教育の場に生かしてゆく上で、どのような配慮や工夫が必要なのか、これを明らかにする必要があるだろう。

この指摘は「女性学」を「ジェンダーをテーマとした授業」と置き換えれば、ジェンダーをテーマとした授業を実践していく授業者の「隠れたカリキュラムとして作用する」ジェンダーに対する価値観と「単なるジェンダーイデオロギーの注入」とをどう相対化するのかという課題である。この課題もまた、授業者にとっては重い課題である。

さらに授業形態の問題がある。女子短期大学で女性学の授業を試みた松井真知子は次のように述べる。[5]

現在、日本のほとんどの大学短大で通常の授業形態となっている大教室での講義様式ほど、「女であるという体験に専門家などいないし、教師と学生という上下関係もありえない。教師も学生もひとりの女性であるという立場に立って、お互いの経験からともに学びあう」という女性学の教育哲学からほど遠いものはない。

今回の私たちの授業も登録上は250名近く、実際の出席者も毎回120名を越えていた。できる限り一方向の授業にならないように工夫したつもりであるが、それにも限界はある。できれば少人数でじっくりおたがいに話し合える授業を望みたいが、現実にはさまざまな制約があり難しい。フェミニズトペダゴジーではこうした課題に取り組み、一定の成果をあげつつあるといわれているが、そうした成果に学びつつ、ジェンダーの授業実践を通して、「ジェンダーペダゴジー」の確立をめざして取り組んでいきたいと思う。

こうした課題をふまえつつさらに大学におけるジェンダーをテーマとした授業実践への取り組みを続けていきたいと思う。

付記：この小論は2001年10月7日に開催された第53回日本教育社会学会大会（於上智大学）において、「大学におけるジェンダー教育実践の課題—受講生

の意識変容を中心に―」と題して、望月重信明治学院大学教授と共同で口頭発表したものにもとづき、文章化したものである。したがって、本来なら望月教授と共同執筆すべきところであるが、種々の事情から望月教授の了解を得て、私ひとりの執筆となったことを記しておく。したがって、文責はすべて私にある。

【注】

[1] 日野玲子「『ジェンダー論』の授業をつくる」藤田・黒崎・片桐・佐藤編『<教育学年報 7>ジェンダーと教育』1999 年、世織書房、144 頁

[2] 同上

[3] 同上、159 頁以下参照

[4] 同上、165 頁

[5] 松井真知子『短大はどこへ行く　ジェンダーと教育』1997 年、剄草書房、254 頁

【参考文献】

朴木佳緒留『「ジェンダー文化と学習」理論と方法』（総合学習への提言—教科をクロスする授業 2）1996 年、明治図書

国立婦人教育会館女性学・ジェンダー研究会編著『女性学教育／学習ハンドブック』1997 年、有斐閣

吉田和子『フェミニズム教育実践の創造<家族>への自由』1997 年、青木書店

日本女性学会会誌編集委員会編『女性学 Vol.6 特集教育の場からジェンダーを問う』1998 年、新水社

女性学研究会編『女性学の再構築』（女性学研究第 5 号）1999 年、剄草書房

亀田温子・舘かおる編著『学校をジェンダー・フリーに』2000 年、明石書店

渡辺和子・金谷千慧子編著『女性学教育の挑戦　理論と実践』2000 年、明石書店